

と答へた、氏は聞いて大に感服の體で、さらに、全生徒に向ひて
 「只今某君の解答は實に要領を得て居る、試験と言へば鹿爪ら
 しい理窟だとのみ思ふのは間違つて居る、かうした頓智が無け
 れば駄目だ！」

と言つたさうだ、又嘗て外交官の試験の時に、

「綴字の一番に長い字は何か？」

と云ふ奇問を發した、スルト、對手は其答に行き悩むで居ると、
 氏は笑ひながら、

「其れは、スマイルスだよ、エスとエスとの間が一マイルもある

では無いか」

氏は時々こんな奇抜な問題を出して面喰はせる、中々以て面白い
 人物だ。

徳富蘆花氏の無邪氣

先年綱島梁川の歿した時、其の葬儀式を壹岐殿坂の會堂に行ふた
 が、生憎當日雨天であつた、蘆花氏は其式に列る爲に徒歩して來た
 ものを見せて、其の質素な羽織に泥が鹿の子斑らに附いてゐたが、
 夫子の無頓着は一向に之に氣が付かなかつたらしい。

斯くて、愈々式が濟むで青山に葬るに當つて、氏は亦列に従ふて徒歩して青山に往つたが、何しろ泥濘の中を歩むだ爲に、其足は土にまみれて汚く成つて仕舞つた。

スルト、氏は墓地の芝生の上に跣足に成つて、其の汚れた足を横に豎に草の上にナスリ附けて泥を落としてゐたと云ふ事である。蘆花の面影は此の子供らしい處にもアリ〜と見える。

徳富蘇峯氏の洋杖

蘆花氏の阿兄たる徳富蘇峯氏のステツキ道樂は有名なもので、氏

の家を訪づれると、其の玄關の處に種々様々の洋杖がさしてある、日本製は勿論、外國製に至るまで、數十本とさし込まれてあるが、氏は之を交はるゝ用ふるのを、其の娛樂の一として居ると云ふ事で、其の珍書を多く蒐集して居ると好對比であるさうな。

山本達雄氏の投網

新農相山本達雄氏の投網と來たら有名なもので、奥平伯と共に雙美と稱へられて居る、其網に興味を持ち始めたのは、其のむかし日本銀行の總裁を廢めて鎌倉に引籠つてゐた頃に遣り始めて、今日で

は非常な上手で、網は大抵四尋半から五尋を打つが、一たび出掛けると五百尾位は譯もなく取ると云ふ事である、浴衣がけに、腰箕笠姿でやる其の手際は、黒人も跣足で逃ると云ふ腕前であるさうな。

■ 縄暖簾をくいる三浦子爵

三浦觀樹將軍の無頓着は有名なもので、其の熱海の別荘に居る時は、何日も百姓と一緒に成つて肥やしの擔ぎを遣る、其の東京に居る間は田舎の親爺の様な粗末な服装で、所々の縄暖簾をくいつて、人夫や、職工と打交つて、隠居とか、おやぢとか、てめいとか言は

れて、之等を相手に機嫌よく飲むたり食つたりする。

■ 舊友を勞はる下岡翰長

先頃までは農商務省の農務局長をして、目下は新たに樞密院の書記官長と成つて居る下岡忠治氏は、時々面白い事を云ふ人物で、一面にまた友誼に厚い所がある、氏の青年時代の學友に今も薩摩の片田舎に燻ぶつて小學先生をして居る人がある、

スルト、氏は此の舊友の寂しい日を送つて居る心事に同情して、昔日の友誼を忘れず、二十餘年の久しき絶えず文通して、春夏秋冬

の見舞を怠らす、剩さへ、時々新刊書を送つて之を慰めて居ると云ふ事である。

■伊藤大八氏の大氣焔

政友會の伊藤大八氏が嘗て滿鐵の理事や、勸銀の總裁に擬せられた時に氏は人に向つて、

『僕が嘗て役人生活をしてゐた頃には犬塚大阪府知事や、小松遞信次官などは皆僕の部下で、殊に犬塚と來たら、其頃は學校出のホヤ／＼で理窟ばかり捏ねて生々しい所があつたから、僕は

種々と意見を加はへたものだ、其の僕が大臣なら兎も角、今日滿鐵や勸銀の番頭や手代に成れるものか』
と大氣焔を吐いてゐた相ぢや。

■三菱現主人の逸事

父の彌太郎と叔父の彌之助との長所のみを併せて居ると稱せらるるが、其實大の腕力家で、殊に太ッ腹で、頭腦の明晰な平民的人物だ、嘗て其の所有の長崎造船所の職工が大ストライキを遣つて、

縣廳や、警察でも、非常に狼狽を極めたが、氏は此報に接して、落ち付き拂つて。

「打遣ツて置け、手を付けるな、何の位まで遣るか思ふ存分に遣らして見たら善からう！」

と電命したと云ふ事だが、果して間もなく職工の方から折れて治まりが付いた。

岩崎久彌氏は斯くの如き人物で、三菱の三代將軍であるが、氏に就いて尙面白い話がある、其は氏が海外留學を了へて歸朝した當時の事であつた、三菱家に縁ある人々が或る宴會を開いた事がある、

スルト、其席に侍つてゐた紅裙連が、三菱の子息たる氏に向つて

「何うぞ、お見知り置きを願ひまする！」

と、恭々しく陳べ立てると、氏は改まつて

「はい！、何うぞ宜しく……」

と眞面目で語り出づる態度には、流石の藝者連も避易して、二の句が續かなかつた。

■ 柳原子の福壽草

本郷區元町に居を占めて居る柳原子翁は非常に園藝植物に興味を

有する人物で、中にも福壽草の如きは多趣多様、殊に高價な逸品と稱すべきものがあつて、其の栽培には非常なる注意を以てして、其の所有には比儔の稀なものが多いと云ふ事である。

■古在博士の奇譚

農學博士の古在由直氏が、先年文部省から獨逸に留學を命ぜられて、彼國に滞在中は何日もボロ／＼に成つたフロックコートに少しも鍔を當てない毛立つた帽子を冠つて、平氣で市中を歩いてゐたから、友人間では氏の帽子を棕犬の絹絹と稱へてゐたさうだ。

ところが其頃今の法學博士の岡田朝太郎氏が、巴里から一緒に歸朝しやうと言つて來たので、古在氏は急に歸朝する氣に成つて、直様下宿の荷物を片付けて、例の棕犬のシルクハットを冠つて花の都の巴里に堂々と遣つて來た圖は實に珍妙素敵なものであつたと云ふ事ぢや。

■田中館博士と耐震家屋

理學博士田中館愛橘氏はかつて、理科大學の學生時代に藤澤利喜太郎氏、田中正平氏と鼎立して三奇人と稱へられてゐた丈に、氏の

卒業後にも奇談は随分に多い。

性來が淡泊の人物で學術研究の爲には一身を献ぐる篤學者であるから、風采などには頓と無頓着で、儀式の時に着用するフロックコートさへ羊羹色を帯びて居ると云ふ始末。

往年學術取調の命を受けて根室に出張してゐた時の事である、恰も其頃に近藤廉平氏が根室に来てゐたが、田中館氏が此地の耐震家屋に籠つて熱心に地震に關する研究をして居る模様を見るべく博士を訪ふた事がある。

スルト、博士は此時その座敷の真中に洋服を着たまゝ大の字に寝

轉むで、凝つと考へ込むでゐたが、來客の音に氣付いて起き上りながら、シゲ〜と近藤氏の一行を見て。

「やあ、近藤さんか？」

と挨拶して、一行を室に通して款談したと云ふ事で、流石無邪氣で、篤學の有様には一行も感じ入つたと云ふ事だ。

聞けば、氏は當時たゞ一人、此の山寺の様な耐震家屋に引籠つて二十日あまりも住み込むで、食物は日々根室の旅宿から運ばせて、専心一意その研究に従事してゐたのちや相だ。

■藤澤博士の綽名

田中館博士と共に理科大學學生時代に三奇人の一人と稱へられた藤澤利喜太郎が、學生の寄宿舎に同窓の豪傑と怪爛奇爛を揚げてゐた頃、學生間で綽名が流行して、其友人の市島謙吉氏は顔色が其頃瓢箪のやうに青かつたと云ふ所から青瓢箪と稱へられ、議論横生の故山出一郎は口から先きに生まれたかの様に喋舌り立てるので喋々子と綽名され、藤澤氏其人は色の黒いと云ふ特長から割り出されて小鳥と云ふ尊號を奉られてゐたといふ。

■旅館で冷遇された黒板博士

文學博士の黒板勝美氏は頗る仙骨を帯びた學者で、然かも中々に喰へない人物だ、先年信州上諏訪の一旅館に止宿した。

所が氏の風采態度が餘りに粗末なので、旅館では非常に見縊つて下等な部屋に通した、スルト、氏は直に部屋の取變へを命ずると旅館では兎も角、部屋だけは取り換へたが、待遇は舊の如くに冷淡で、碌な副食物は無かつた、しかし、飯米だけは上等米であつたから、氏は十二杯も平らげて旅館の給仕を驚かした相だ。

かくて、氏は翌日出發すると云ふ時に成つて、番頭を呼び付けて
 「此家は待遇が悪いから茶代を置かぬ！ 女中に心附も遣らぬ！
 しかし、飯の炊き方は如何にも上手ぢや、此上とも大切にしてい
 遣れ！」
 と言ひ終つて、飯炊へと言つて心附を置いて、悠々然と立ち去つ
 た。

■老女學生然たる嘉悦女史

女子商業學校長の嘉悦孝子女史が、先頃麴町の二松學舎に通つて

三島翁の漢學聽講に行つてゐた姿は、粗末な綿服に大きな本の包を
 抱へて、テク〜と歩いて行くので、其の老女學生然たる態度に、
 其の經營する學校の生徒は非常に感憤したさうだ、近頃も相變らず
 御通學か何うか其邊は耳の長い拳骨坊も流石に聞き漏らしたが、女
 史はまた毎年暮の餅搗に成ると、學校の寄宿舎で盛んに搗くが、然
 かも男手一つ借りる譯でなく、大きな杵を持つて、女史が先に立つ
 て搗くのぢや相だ。

■大蛇と綽名さるゝ塚田代議士

埼玉縣選出の代議士塚田啓太郎氏は、風采の質朴な田舎爺に宛然だ、選挙区には非常の信用がある、氏が談論に花を咲かす時にはべろくと舌を出して喋舌る癖があるので、大蛇と云ふ綽名がある。先年普通選挙案の出た時に、氏は其の提出者の日向輝武氏の討論のあとで反対演説を遣つた、スルト、日向の蛇の後に塚田の大蛇が出たと云ふので大評判であつた、日向氏夫妻が揃も揃つて蛇の好きな事は、読者が先刻御承知の事と思ふから、今更註釋を加へるに及ぶまい。

宮川女史の獨身論

女子高等師範の教授で、家事經濟の學に通曉あらせらるゝ宮川壽美子女史、いつぞや人に向つて。

「私は獨身ですが、しかし、夢にも女子の獨身論などいふ生意氣な事を考へた事はありませぬ、私のやうな口許り達者で、何も出来ない女が殖えるのは國の不吉であります、たい結婚期に貫ひ人がなかつた許に、獨身生活をして居ると云ふまでいす、しかし、今日では公の御用に命がけですから、今は何んなに親

切に仰しやる方があつても、命が二つない以上は家庭なんか持つ心に成りません』
 など、言つて居る。

■神野金之助氏の氣焔

名古屋の實業家で、一時は東本願寺の金穴と稱へられてゐた神野金之助氏は、毛利公失敗の後を受けた新田開拓の大山が當つて、一千一百町歩の大地主と成つた、氏は子供の時から三國志と太閤記とを愛讀し、道學頭巾を冷評して、たゞ人間を小にするのみで、乾坤

一擲の壯舉を演せねば成らぬ事業家にはトンと用の無い代物だと言つてゐた相だ。

■砲彈を足にして眠る小柳津翁

丸善の小柳津要人翁は、其齡七十前後なるに拘らず、其の元氣は壯年も及ばぬ程に優勢で、終日事務を見て一向に倦む事を知らない氏は寒中には足が熱して眠れないので、夜具の外に砲彈を横たへて其上に足を置いて漸く眠るさうである。

■ 嚴肅なる山川博士

新たに東京帝國大學總長と成つた理學博士山川健次郎氏は、舊會津藩の出身で、其の人物の謹嚴なる親友に對してすらも、決して丸腰では面會せず、羽織袴か、洋服かを着けた後に逢ふと極めて居る。

また氏と電話で話をしやうとするには自分の姓のみ名乗つたのでは決して出ない、必ず其の名前を聞き質して後に始めて電話口に立つと云ふ事である、従つて自分から電話をかける時には、必ず山川

健次郎といふのが常である。

氏は誕生以來いまだ嘗て一度も傾斜の巷に出入した事が無い、されば、宴會の席上などでも藝者が居ると、必ず其席を立ち去る事にして居る、人が其の理由を聞くと。

「彼等賣笑婦と席を同じくするに忍びない！」

と言つて居る、何處までも謹嚴なる人物で當代には珍らしいタイプの人ぢや。

■ 江原翁の吉原見物

山川博士の謹嚴の其れの如く能くも似たる逸談が江原素六翁にもある、翁は固より謹嚴温厚の人物で、其の青年時代からまた花柳の地を踏むた事が無い、所が近年或る機會に吉原邊を通過した際に、晝の眞晝中に知人に案内されてか、兎に角、吉原なる廓の模様を見るべく素通りして、

「吉原と云ふ所は繁華な地と聞いてゐたが客も見えない、彼様に淋しい所か？」

と眞顔に成つて話したと云ふ事である、夜の吉原と晝の吉原との區別が、此の謹嚴な翁には解らないので、之を聞く者皆翁の眞面目

に今更のやうに驚いたと云ふ事だ。

■紋附羽織で洋行の湯原校長

東京音楽學校長湯原元一氏は、固と帝大にゐた頃には醫科を修めてゐたと云ふ事で、獨逸語の至つて甘い人で、教育家には稀な硬骨人物だ。

先年音楽教育視察の爲に洋行の途に上つた時に、其の旅装は極めて簡單で、たい大きな柳行李二つを購つて、燕尾服もフロックコートも携へずに出懸けて到る處の公會には紋附羽織袴で出席して、彼

の地の紳士淑女に見えたと云ふ事である。

■器用千萬な福原次官

文部次官の福原鏢次郎氏は至つて頭腦の善い人物で、其の學生時代には一番で通したと云ふ事である、殊にまた手先が至つて器用で風琴でも、ピアノでも、本職をへこます程の腕前を持つて居るさうである。

しかも、其の服装などを構はない、されば何日ぞや、金澤に出張した時には、身なりが粗末なので或る旅館の番頭に其の宿泊を断は

られた事があつたといふ事ぢや。

■阪谷男のへポ將棋

東京市長の阪谷芳郎氏が、先年平和協會の經濟會議に臨席した歸途に、英京倫敦に立ち寄ると、三井家の磯村豊太郎氏が案内者と成つて相共にポーンマウスに遊ぶで、つれづれの餘まりにへポ將棋を始めて後に二人者は共に狂歌を駄句つた、磯村氏は『阪谷男と將棋を闘はして大勝利なれど武士のなさけ』としてと云ふ偉い前置詞を付けて、

へポ將棋、勝負は兎角、時の運

勝つても、左程うれしくはなし

と遣らかすと、男は、

平ポーンと、思ひの外の、好き相手

いや感心と、恐れ入りマウス

と詠むで、ポーンマウスを読み込むで興じてゐた。

■橋本次官の硬骨

新農務次官の橋本圭三郎氏は、極めて正直の硬骨漢で、意見が合

はないと、相手かまはず、侃々諤々の議論を吹きかけるさうだ。

何日ぞやも、桂公が藏相であつた時に、何かの差圖があつたら、

其の意見に慊らぬ所があつて、氏は、

「閣下其れは可いませぬ！」

と頑張つた、スルト、平生から氏の率直な所を知つてゐた桂公は

優しく事情を述べて漸く収まりが付いたと云ふ事だ。

■流石物に馴れたる元田遞相

新遞相元田肇氏が前内閣時代に拓殖局總裁をしてゐた頃には、同

局で非常に評判が善かつた。

朝は九時から晩の五六時頃までセツ／＼と執務して、極めて平民的の態度を取つて、

「財政問題や、司法問題ならば、多少の意見は無いでもないが、殖拓と來たら全く猫に小判だ、しかし、仕事は随分に多い其れに智識経験も相當に要る、まあ當分は見習をして其れからいよいよ本舞臺に取りかゝる譯だ！」

など、語つてゐた。

■山縣公に苦言したる平井院長

赤十字病院長の平井政道氏は、其の陸軍一等軍醫の時代に、山縣公に隨行して外遊した事がある。

此時船中で山縣公が腸を病むだから、氏は熱心に治療を加はへたるに拘らず、公は不消化物を食つたり酒を飲むたりしてトンと氏の養生法に従はないので、病氣は次第に重くなると云ふ姿であつた、スルト、氏は之を憂ひ一日公に向かひ肅然と。

「閣下は陸軍大將で、拙者は一等軍醫であります、しかし、患者

としての閣下は主治醫たる小官の命に服従なさらなければ成りませぬ、若し今後小官の申す事をお用ゐるに成らなければ、小官は閣下の病を治療する事は出来ませぬ！」

と顔を犯かして熱心に語つたので、以來公は氏の言を守ると共に、深く其の人物と技量とを信じたと云ふ事である。

■ 俠骨稜々たる岡田博士

醫學博士の岡田和一郎氏は青年時代から利かぬ氣の人物で、其齡を重ぬるに従つてますます強くなると云ふ噂があるが、然かも、其

の衷心に稜々たる俠骨を有する點に至つては醫界には珍らしい人物である。

近年の暮に或る一友人が何か事業に失敗して、其の經營せる會社の潰れかゝらうとしたので、氏は其の救濟法を立て、友人相互の間で、七百圓づゝ出金する事を提議したが、誰も之に應じなかつたので、氏は獨力で三千圓を出だして其急を救ふたと云ふ事だ。

■ 草鞋携帶で洋行した池野博士

農科大學に於ける篤學家、博士池野成一郎氏が、先年佛國に留學

を命ぜられた時に、草鞋百足を携へて行つて靴に代用しやうと思つたが、流石蠻殻黨の旗頭も、さて巴里に着いて見るとさうは往かないので、一足だけを穿いて残りは穿かなかつたと云ふ事じや。

■加藤代議士の奇警な觀察

嘗ては公使をも勤めて今は代議士と成つて居る加藤恒忠氏が、或時歐米人は獸性で日本人は禽性だと云ふ月旦を下だした事がある、其の曰くが頗る振つて居る。

『日本人の衣服は禽の羽に模し、西洋人の衣服は獸の皮に模し、

日本人は穀物で西洋人は肉類を常食とする、日本人は親子の愛情に富み西洋人は夫婦本位である。日本人は輕快で心が優しいが、西洋人は重々しくつて時に殘忍の行をする、日本人は花鳥を描くに巧妙だが、西洋人は獸類を畫くに達者だ、之も神靈の相通するものがあるからで有らう！』
と云ふのだ、實に一考すべき觀察である。

■牛島馬鈴薯王の送別會

米國に於て馬鈴薯王と囃さるゝ牛島謹爾が、其昔我國を出立して

彼國に航せむとする時は、今日の成功を來たす者とは誰も豫期しなかつた。

従つて、其の送別會は極めて簡易質素なもので、氏の親友なる今の三越の主任の日比翁助氏と酒一本に、煮豆か何かを下物として心ばかりの宴を開いて、長風萬里彼國に航して、波瀾曲折多き境遇を経て今日に至つたと云ふ事である。

■岩下清周氏の赤毛布

北濱銀行の頭取として財界に知られて居る岩下清周氏が、往年三

井物産の佛國里昂の支店に居た時の事である、貴婦人集會の席上で。

「なにがしさんは妊娠中で大きなお腹を抱えて御座る！」

と云ふ様な事を話し出した、スルト、婦人連は一人去り、二人去り、遂に皆々が歸り去つて仕舞つた。

氏は當時西洋では婦人の前で、妊娠の事を話すのが失禮である事を知らなかつたので、今に赤毛布の一として傳へられて居る。

■干魚の好きな小崎夫人

靈南坂の會堂に熱心に基督教の福音を傳へらるゝ斯界の大家小崎

弘道氏の夫人千代子女史は、干魚が好物で、其の未婚時代に、

「何か世の中の爲に成る仕事をして呉れる人に嫁したい、今一つは干魚を食はせて呉れる男子なら宜しい！」

と言つて、干物の御馳走が婚姻条件の中に數へられてゐたと云ふ事である、極めて淑やかな夫人で、其の家庭の教育は行き届いて、其の子女は學校でも優良の模範と成つて居る。

■矢野夫人の世帯振

ポケット論語の作者、藝者論の著者として知られたる實業界の矢

野恒太氏の夫人敏子女史は、子供に虚偽を覚えさせるのは召使に對する主人の蔭日向からも起ると云ふ處から、下婢への待遇は總べて家族同様にし、家族の衣類は悉く女中達に知らせて置いて。

「私のも見せるからお前達のも見せてお呉れ！」

と言つて、百姓の娘のハイカラ的に成らない様な習慣を着けるさうである。

■小金井夫人の教養振

森鷗外博士の令妹として一時は大に文壇に盛名を馳せた喜美子女

史、一旦小金井博士に嫁いで以來、家事の爲に自から文壇に遠ざかつて、只管篤學な小金井博士を内助して、家事萬端を切り廻し、子供の教育に就いては學校の成績にかゝはらず、勉強するやうにさせて居る、殊に女子に對しては、何處にでも縁付いて融通の利くやうに苦心して教育する。

「私どもの宅のやうに主人が常に机に凭つて居るやうな家庭に育つたものが、凡て反對の處に縁付いて役に立たない様な事があつてはと、其れのみ心配してゐます！」

と語つてゐた、相である、然かも、其の子女は女史の感化を受け

て、學術も人物も共に出來がよい。

■馬車嫌ひの牧野外相

外相牧野伸顯氏は久しく海外にゐた經歷を有するに拘らず、大の非ハイカラ黨で、簡易質素な生活に安んじて居る、殊に馬車に乗る事がキツイ嫌ひである、之れは其の父君大久保内務卿が馬車で紀尾井坂を通る時に、明治十年の凶變に會つた爲めなので、常に人力車に乗つて、滅多に馬車に乗らない、また其子に對する教育振は平民的で、汽車に乗るに學生は三等で十分だと言つて二等に乗らせた事

が無いと云ふ程である。

■ 禪的生活の松田正久氏

松田正久氏の家庭生活は極めて質素で、宛然判任官の生活を見てもやうなと云ふ事だ。

氏が家に居る時は小言も言はなければ笑ひもせず、黙々と書を讀み思を凝らすと云ふ風で、家に居るのか居ないのか解らない位で、朝は牛乳一杯と麵麩を食ふだけだが、其れさへ自分が臺所に往つて、自からパンを焼いて牛乳を飲むで奥座敷に歸ると云ふ風で、頗る枯

淡の禪味を帯びて居ると云ふ事である。

■ 大隈伯の藝者論

大隈伯、先頭人に向つて、其の國事に奔走したる少壯時代を述べて。

「我輩の國事に奔走してゐた頃は、藝者までが。

俗吏頭を叩いて見れば因循姑息の音がする、書生頭を叩いて見れば尊王攘夷の音がする。

と歌つたものだ、今時の藝者にも、何とか一風變つた所を謠は

せて見ては何うじや」

と、例によつて例の如く、八面玲瓏の論陣を振り翳さして藝者評を試みた相だ。

■清浦子と横田國臣氏

子爵清浦奎吾氏と横田國臣氏とは極めて親密な關係で、清浦氏が廣瀬塾の塾頭を遣つた後に横田氏がなり、清浦氏が上京すれば横田氏も上京し、清浦氏が埼玉の小學校教員となれば横田氏も其後を追ふて小學校教員と成つた。

其後清浦氏が司法省に入ると横田氏も入り、清浦氏が司法大臣になると横田氏は控訴院長に、或は大審院檢事總長に成ると云ふ風で、其の關係は影の形に添ふが如き趣がある。

■森村翁の眞面目

實業界の勳功者森村市左衛門翁は、家人に對しても雇人に對しても一向に隔てを置かない、のみならず、途中から車に乗る時には「車屋さん！、何處まで往つて下ださい、寒むいのお氣の毒です！」

と挨拶する、そして、車を下りた時には

「寒いのに氣の毒でした！」

と禮を述べるので翁の眞面目に出會つては、如何なる車夫もウンザリして仕舞ふ。

■山座圓次郎氏の友愛

外務省の利者山座圓次郎氏は豪爽の中にも情誼に脆い所がある、氏が其の令妹を日露戦争に偉勳を奏した故陸軍大佐吉岡友愛に配せしめた昔物語には珍無類の譚がある、そは氏と吉岡氏とは竹馬の親

友であつたから、一日吉岡氏に向ひて。

「吉岡！、僕の妹を娶つて呉れないか？」

と切り出すと、吉岡氏は異議なく。

「善からう、君の妹なら貰ふう！」

と即座に解決が付いた相だ、かくて、氏は一日妹を伴れて吉岡氏の下宿を訪ふて大きな聲で。

「吉岡居やるか？」

と訊けば吉岡は聲に應じて。

「おう居るぞ！、國から伴れて來やつたな上りやれ！」

と、福岡言葉丸だして、斯くて結婚の儀式も芽出た、簡畧に其場で済まして仕舞つたと云ふ事であつた。

斯くて、吉岡夫妻の間、極めて睦まじく暮らしてゐたが、吉岡氏が其後日露戦争に於て歩兵第三十三聯隊に長として、奉天の西方なる李官堡に於て名譽の戦死を遂げ、殊勳中の殊勳者として其の功蹟を全軍に表彰せらるゝに至つて満洲に葬られたのであるが、氏は後年満洲に至りて、遼陽に於ける吉岡友愛の墓に詣で、

遼陽の、野邊に匂へる無名草

手折りて君の、魂やまつらむ

と平生の蠻骨に似氣なく情愛の擲す可き天真を流露した句を詠むで其の義弟を吊ふたと云ふ事だ。

■荷物同様にされた宗演神師

釋宗演師が其のむかし慶應義塾にゐた頃、恰も世は物質的文明に謳歌する時節であつたから、英氣勃勃たる氏は、一時は煩悶して還俗して大に一大飛躍を試みやうと思つて、其旨を福澤翁に話すと、翁は笑つて。

「其様な事は言はないで、一旦佛學に志して今日に至つた以上は

其志を翻さないで、錫蘭島に往つて其の源流に溯るが善い！

と答へたと云ふ事である、斯くて氏は其後山岡鐵舟の助けに資つて、いよく印度錫蘭に航する事と成つたが、當時は我國の航海業が未だ振はない時で、三菱會社の汽船は上海行すら稀有の時であつた、

されば、氏は止むを得ず、獨逸の荷船に乗つて殆んど荷物同様の扱ひを受けて、或時は甲板の上で新嘉坡の夕立に逢ひて、滿身皆シヨボ濡れて、日の晴るゝを待つて之を乾かすと云ふ慘めな境遇に接

した事すらあつた。

のみならず、氏は其頃酒と煙草が大好物であつたが、自から其心に誓つて。

「酒と煙草とを廢めなければ沙門の賊である！」

と思つて、キツバリと其の旅行に上る時に廢して仕舞つたので、其の急劇の變化の爲に心身が非常の異狀を來たす等で、何や角で言語に絶するの艱難をしたと云ふ事である、印度に在る三年、深い修行を積むで歸朝した。

■長岡博士の學問輸入論

先頃倫敦物理學會の名譽會員に推薦せられた理學博士の長岡半太郎氏が、其の名譽會員に推薦されたのは、原子の模型といふ論文に由ると噂されて居る、氏は人に向つて。

「近頃外資輸入が多額に上つたと言つて世間では騒いで居るが、學問の輸入と來たら殆んどお話に成らない、之から少し學問を輸入するのも面白いだらう！」

と、氏が學界に對する意氣と抱負とを窺ひ知る事が出来る。

■大谷翁の養生法

横濱の大谷嘉兵衛翁が老來意氣のますく盛んなるは、其の三つの養生法が非常に好影響を來たして居ると云ふ事である。

其の第一は樂觀的精神を養ふこと、其の理由は病は氣から起るから、若し心配事があつたら我が爲になる事であると思つて樂觀するので、第二は節食、節酒、禁煙である、第三は鼻の掃除で、鼻は萬病の本であるから、毎朝洗面の後は幾回も鼻から水を吸つて口に出だすのである。

■松岡康毅氏碩學を驚かす

かつて農相をした松岡康毅氏は、其の出身の司法官たりしだけに、其の法律に關する智識は驚く可きで、往年獨逸に往つた時に奥國の法制學者のスタイエン博士と會見して應答した時に、流石博士も氏の識見に驚いて。

「日本の松岡氏の博學には驚いた、日本の司法制度は勿論、其他、法律上の質問に對して松岡氏ほどに明快に應答したものは無い！ 實に珍らしい人物だ！」

と感嘆の辭を惜まなかつたと云ふ事である。

■田尻博士の地獄志願

會計検査院長の田尻稻二郎氏、時々奇抜な事を言つては聽者を煙に捲く事が屢々である、何日ぞやも眞面目な顔で、

「死んだら何うか地獄に行き度いものぢや」

と語るから、聽者は怪むで。

「閣下其れは何故で御座る？」

と訊くと、氏は洒々然と。

「何故ツて、地獄には源頼朝も、太閤秀吉も、徳川家康も、ナポレオンもビスマルクも居るぢやあないか、此外いろいろと變つた人物があるから話の面白いものを持つてゐるだらうが、極樂には碌な亡者が居ないからだ」

■井上博士夫人の世帯ぶり

文學博士で、妖怪學博士として知られたる井上圓了氏の夫人けい子女史は、其の良人が平常不在勝なので、子供の教育を始め、家事萬端一々夫人の手で經營されて居るさうだ

のみならず、子供を教養するに、起臥、飲食、規則正しく、例へば間食でも午前の十時と、午後の三時にキッチンと極めて遣るといふ風にして、其時が來なければ決して與へないと云ふ事である相ぢや。そして、其傍ら今の東洋大學の前身、哲學館時代には、圓了氏を助けて男の事務員が數人もかゝる仕事を殆んど一人で引受けて、テキバキと處理してゐたと云ふ事で、隠れたる婦人の模範の一人として中々の評判である。

■仲小路廉氏の御残念

極めて眞面目な人物ぢやさうな、されど人間木石にあらざる限は時々妙な考の起らぬでも無い、立憲同志會の一領和仲小路廉氏が、いつぞや廣島に旅行した時に、道に備後尾道に立ち寄つて、フト此地の美人を見て食指がいさゝか動いたものか此地に一泊して廣島に行き度いと言ひ出だした。

スルト、同行の廣島土木出張所長の青木なにがしが、

「今晚は廣島で歡迎會の準備がしてあるから、是非にお出で下ださらぬと可けない！」

と促がすので、氏は止むを得ず厭かぬ思を發して廣島に往つた。

斯くて、其後に聞くと、青木氏のみは、尾道に踏み止まつて、獨り此の美人と相思の仲と成つたと云ふ事だ、氏は此事を聞いて、青木氏に會ふ毎に、

「君は酷い男ぢや！」

と零してゐたさうだ。

■肝付中將の御名吟

肝付兼行氏は柄にも似合はず、都々逸なども中々に甘い、嘗て長野縣に往つた時に、養蠶でなければ夜が明けない様に言つて居るの

を聞いて、

心細いよあの一本の

糸がにほんの命綱

と詠じた、養蠶より得る輸出貿易は年々一億數千萬圓、全く日本の財源である。されば、氏は此の述懐を詠じたのであるが、氏は常に。

「日本人はいつも農業立國など、夢みて居ないで、海に出なければ盛だ！」
などとと語つて居る。

■武藤山治氏に秘密なし

鐘紡の専務武藤山治氏の逸話は珍らしくない程、世間に聞えて居るが、氏は其の信条の一として。

「人間が秘密を有するは恥づべき事である！」

と云ふ考を以て居るから、他人が之は秘密だよと念を押して話した事も、氏の脳裏には左程に感じない、従つて遠慮なく他人の秘密だよと念を押した事も、頓とお構ひなく皆にサラケ出して仕舞ふから當人は飛びだ迷惑を感じる事もあつて、

「武藤君の様にあゝ開放主義では困る！」
と零すと云ふ事であるが、氏は其の信條から更に痛痒を感じないさうだ。

■北條時敬氏と袋叩

これも前に紹介して置いた北條時敬氏の事だが、氏が金澤に高等
學校長をしてゐた時代の事だ。

學生の風紀を嚴にする爲に非常に取締を固くした事がある、スルト、血氣盛りの青年學生は此の嚴格なる規則に避易して、果ては校

長と學生との睨合となつて、亂暴な學生は五六人集まつて、氏を要
撃して袋叩にした。

校長の袋叩、一度び校内に傳はると、學生中のオツチヨツコチ
ヨイは非常に喜むで痛快を呼ぶ、一面教授の面々は苦蟲を噛み殺し
て校長の腑甲斐なさを嘆息すると云ふ始末。

然かも、氏は幾日を経過しても、袋叩をした學生を處分しない、
そこで、或る一人が氏に向つて。

「亂暴を働いた學生に退學處分をしなければ、校紀を維持する事
が出来ませぬ！」

と交渉したが、氏は平氣千萬で

「ナニ、打ツちやつて置きさへすれば今に自分の考が生徒に解かるに相違ない、若い時分には亂暴はあり勝のものさ」

と答へた、曩に亂暴を働いた青年は、其頃非常に悔ひて何うなる事かと打ち案じてゐたが、氏の此の一言を傳へ聞いて、いよいよ以て氏の志に感激して校紀はます／＼振肅して來たといふ。

田尻博士の大罵倒

田尻稻二郎氏が先年東京市役所からの依頼を受けて市の講演會に

出席して、一場の演説をした時に、其の演説中に、

「大金をかけて高い地所を潰おして日比谷公園などを作るのは馬鹿の骨頂ぢや」

とか、或は、

「東京の橋の名はみな橋の右側に書いてある、にかゝはらず、巡查が左側をお通りなさいと言ふから、あれぢやあ橋の名を見る事も出来ない」

と云ふ風に、例の滑稽皮肉の語調で、散々に市役所の仕事を罵倒したので、市吏員之を聞いて、

「田尻先生の様にあゝ皮肉られては耳が痛くつて溜つたものじやあない！」
と零ぼしてゐたさうだ。

■根本代議士のフロックコート

茨城縣選出の代議士根本正氏は、其の米國に留學してより今日に至るまで、約三十年の間、未だ嘗て和服を着用しない、朝起きれば直ぐにフロックコートを着て、散歩にも往けば議會にも往く、そして十年一日の如く禁酒禁煙を唱へて居る。

■平田先生の權幕

神田明神の神宮で、國語傳習所や、大成中學などに教鞭を執つて居る平田盛胤氏、根は至つて善い人じや相なが、其の毒口を吐く事は有名なもので、其顔も何となくキツネ所がある、生徒に向いて時々。

「殴り仆すぞ！」

と怒鳴り付ける、其處で生徒は氏を指して「ハリタオス先生」と云ふ綽名を付けて居る、従つて氏の時間に成ると、生徒は口々に。

「コラ今度は殴り仆すの時間だぞー」
と叫ぶと云ふ事だ。

所が或年神田明神の祭禮の宵宮の日の事だ、氏が御輿渡御の露拂といふ格で、衣冠束帯厳めしく肥馬に跨つて進むで居ると、大成中學の腕白盛りの學生が此様を見て、態と氏の後に寄つて、口々に

「こら殴り倒すぞー」

と叫むだ。

祭禮といひ、場所柄と言ひ、衆人環視の中といひ、流石の氏も之に聊か閉口して、馬上から背後を顧みて、其れとなく目で知らせて

も、腕白學生は中々避易しない、大笑しながら、依然と。

「ハリ仆すぞー！ コラはり仆すぞー」

と連發するので、氏は愈々閉口して、怒るに怒られず、笑ふに笑はれず、殆んど泣き出ださん斗に辛かつたが、翌朝教室に出で、昨夜の生徒等を見て、

「皆さん！ 將來は決して殴り仆すなんて云はぬから、以後は、

はり仆すの連發は御免にして下ださい、明日は神田明神の本祭ですから殴り仆すは御免にして戴き度い！」

と詫を入れたが、其後日を経るに従つてまた例の調子で、ハリ倒

すが始まつたさうだ。

■尾崎學堂氏の進退論

進歩黨を去り政友會に入り、政友會を去りて政友會に入りたる尾崎學堂氏の去就進退に就いて、多年彼是と噂するものがあつたが、氏はこれまで空吹く風と聞き流して遂ぞ一言の辯解をした事がなかつたが、先頃ある話の序に人に向つて。

「世間では我が輩が大臣に成り度いから節を變じて政友會に走つたのなど、揣摩憶説を立てる人があるが可笑しくて溜らない、

何も我が輩が節を變じたのでは無い、我輩の主義は終始一貫して居る、三十年前も今日も同様である、我輩が屢々黨籍を變へたのは、政黨の主義主張が常に變遷して、我輩を去り、また我輩に來るのである、恰も富士山は千秋萬古變らないが、其麓を廻る汽車が日々夜々に變り行くやうなものだ！」

と語つた。

■福島將軍の苦學

陸軍中將福島安正氏が其の青年時代に苦學中は、早稻田の北門社

にゐたが、其頃の氏は學資が缺乏して貧苦の絶頂に達してゐたので、
 支冬素雪、風寒き日にすら、單衣一領、破袴一枚、臥するに蓐なく
 止むを得ず、夜を徹して寒燈に書を読み、晝間に日光に浴して僅か
 に暖を取つて眠ると云ふ有様であつた、其後或は教鞭を執つて私熟
 の教師となり、或は他の食客と成つて苦學を續けて遂に今日の地歩
 を占むるに至つたと云ふ事である。

■江原翁の面白い譬喩

江原翁が先頃ある集會で一場の談話をしたが其筋の一節が頗る面

白い、

「日本の鳩は巢を作つて後に牝鳩を見付けて結婚するが、支那の
 鳩は結婚して卵を生むやうに成つて巢作りにかゝる、所が日本
 今日の青年は兎角支那鳩の眞似をして巢を作らぬ中に卵を生み
 始める様だが、日本人は矢張り日本鳩の様な行き方を取るが善
 い、私などは日本鳩式を遣つて来て今では大勢の家族と成つた
 と語り出だしたので、聴者は一同之を聞いて笑崩づれた、流石は
 老功の人物だけあつて面白い含蓄の話が折に觸れてヒヨイ〜と出
 て来る。

■松木局長と源頼光

東京市の電氣局長松木幹一郎氏が電氣局長に成ると、氏の知人が氏に向ひて、

「君！ うまく電線の蜘蛛の巣が拂つて行かれるかね」と聞くと、氏は首肯いて、

「むかし、源頼光が蜘蛛退治を遣つて除けたのは名刀を持つてゐたからだ、我輩の腕の切れ味は頼光以上だと思つてゐるから引ッ懸る心配はないよ！」

と氣焔を吐いた。

■井上博士の御狂言

興業銀行理事の法學博士井上辰九郎氏は、趣味の頗る廣い人物で、狂言、芝居、相撲、碁、將棋は言ふに及ばず、書畫骨董に至るまで精通していると云ふ有様であるさうな。

氏が狂言の習ひ始めに、或る晩、上野からテク／＼歸つて來る道すがら興に乗じて、扇子拍子に膝を叩きつゝ湯島切通の坂を上りかゝると、謠ひ好きの車夫が、

「さらば、お安う参らうするにて候、早く此の車におん乗り候へ」と後を付けて來るので、氏は狂言がりの談判すると車夫は中々に上手と見えて、

「あな嘆てやな、これなる人よ、幾ら我等とて斯くは安くは参るべくも候はず」

と、其の狂言の巧妙なるに敵しないで氏は道を急いで逃げ歸つたと云ふ話がある。

■後藤夫人の天手古舞

男爵後藤新平氏は性急な人物と來てゐるから、ダシぬげに葉山に往くとか、何處に往くとか言ひ出だすので、家人は之が爲に時として天手古舞をする事がある相だ、従つて家内は其の心掛でゐて、殊に夫人和子女史は手許から鞆を離した事がなく、何時命令が下だつても直ちに命令の間に合ふやうにして置くと云ふ事である。

■太田大佐のいたづら日誌

海軍改革論を主唱し、或は人民の敵を著はしたる海軍大佐太田三次郎氏が、今の名和土屋の兩將軍等と共に大尉時代には、軍艦松島

に乗組むで時の艦長野村貞を手古摺らせたと云ふ事である。

それは當時軍艦乗組將校は艦内に於る日常の出来事や、天候などを記して毎月一回艦長の検閲を経る事と成つてゐたが、氏や名和土屋二氏などは日常の些事を録するのは詰らないと言つて、相談の結果白紙の儘を出だすと、野村氏は不機嫌で之を叱斥したから、他は命を奉じて書き始めたが、氏のみは中々に書かない、再三督促されて遂に流義を換へて漢文で書き始めると、また艦長から油を絞られて今度は更に「かくなん侍りける」とか「空いと濕めやかに掻き曇りてけり」と言つた様な文體で差出すと、艦長も苦笑して更に言はつ

なかつたと云ふ事だ。

■太田大佐と寺尾博士との大立廻り

時は恰も日露開戦論の盛んなりし時、いはゆる當時の七博士中の戸水寛人、寺尾亨、中村進午、高橋作衛の諸博士を始め、海軍の上泉、太田の諸氏が或る處に出會つて議論した時に、太田氏が、

「何に、俺を艦長にさへすれば何でも構はぬ露艦に發砲して戦争を開始させる！」

と語るを、寺尾博士が何角と反駁したので、太田氏は怒り出して

「なに生意氣な！」

と言ふや、否や、寺尾氏に鐵拳を加へると博士も黙つては居らず之に應戦して大立廻をやつたと云ふ事だ、

■松石少將の試験答案

陸軍の一異采と稱せらるゝ少將松石安治氏が、士官學校に入學する際に、作文の課題に、文章作法といふ様な題が出ると、氏は之に對して。

「作文は須らく甘薯の如くなるべし、初は細く徐々に大きくなり

而して終を亦細く結ぶべし」

と云ふ奇抜極まる答案を呈出したと云ふ事である。

■土肥博士と總生寛

皮膚病の大家として有名な醫學博士土肥慶藏氏は其昔學生であつた頃に、下總出身の古道人總生寛翁に就いて教を仰いで大に得る所があつたが、氏は一日翁に向ひて卒爾として、

「人間世に處するの法は何うしたら宜いのです？」

と聞くと、翁は其言下に、

「已むを得ずして然る後之を言ひ、已むを得ずして然る後に之を行ふに在る、天の人を生ずる各々天職があつて、同一の人は二人とは無い！ 故に各自に其の天賦の才能を現はして、他人の未だ爲さざる所を開拓するのが人間の本分である！」

と語つたので、氏は大に得る所があつたと云ふ事である、氏が醫家として詩文に巧みなのは當時翁に従學した所が興つて大に力があると云ふ事だ。

■吉田博士の軍隊生活時代

文學博士吉田東伍氏が其昔丁年に達して兵營生活をしてゐた時の事であつた、當時政府當局者と民間に於る政黨員との間が、兎角軋轢を生じてゐたので、軍隊の間にも其の頃は規律が今日の如くに整つてゐなかつたから、其の影響を受けて、將校の中で、

「來る明治二十三年に國會を開設せらるゝ頃には、自由民權の論戰より惹いて一場の戰亂を起すに相違ない、其時こそ一舉に内亂を平らげなければ成らぬ！」

と云ふ様な事を豫言してゐたので、氏は之を聞いて不平滿々。「抑々國に兵を備へるのは固より内亂を鎮むるのも一條件には相

違ないが、立憲政治といふものは是非到来すべきものである、かつ立憲政治の出来た曉に政府と議會との衝突は免がる可からざるものである、ざるに、何事を國家を守る干城たる軍人、然かも將校の語氣が軍備は主として外國に備ふべき時代に、憲政を解せず全く國民を敵とするが如き口吻を漏らすとは驚き入らざるを得ない」と

と、熟々と感じて、將校志願などの考は當時露微塵も起らなかつたと云ふ事である。

■島崎藤村氏の洒落

小説家の島崎藤村氏は、近頃は何うだか知らないが先年ごろは其袂に種々の煙草を入れて、交はるゝ之を喫むでゐたので、或る人は氏の喫煙法を評して、

「小説家と云ふものは違ふ、煙草を喫ふさへ鑑賞力を養つて居る」

と言ふものもあつた、また或る客が先頃氏を訪ふて、

「此頃はチヨイ／＼お書きに成りますな」

と語ると、氏は之に答へて。

「私は此頃小作人に成りまして、アチラの田を少しばかり、コチラの畑を少しばかりと言つた風に遣つて居ります！」
と答へた相だ。

■西園寺侯の多病

侯爵西園寺公望氏が政治家としての偉器たるは誰れ知らぬ者も無いが、惜しい事には氏は非常に多病で、病氣といふ病氣は何んでも有つて居ると云ふ有様で、嘗て人に向つて、

「我輩に用の無い醫者は唯婦人科だけで、外は何科たるを問はず我輩になくしては成らぬ」

と語つた事がある、されば、氏が政治上の大經綸を斷行せんとする場合に病氣の爲に思ふやうに出来ない場合が屢々あつたと云ふ事である。

■流石觀樹將軍も一本參る

觀樹將軍三浦梧樓氏は中々利かぬ氣で、容易に人に許さない、所が或日氏は人に向つて勝西郷の存命時代に、

「乃公も勝か西郷か、内閣を作るなら一腰折つて働いて見ても善い！」

と言つた事がある、勝とは言ふまでも無く勝海舟其人で、西郷とは西郷従道其人なのである。

而して三浦が西郷の人となりに感じたのは、今から一ト昔のこと西郷従道が臺灣征伐に行く時であつた、氏や、曾我祐準氏などの面々は、非常に立腹する事があつて。

「二應の話は爲さうな者ぢや、恚う云ふ大事件を我々に無断で決めて仕舞ふと云ふは餘りに人を無視して居る！」

と言ひ出だして、三浦氏や、曾我氏といふ様な一騎當千の豪傑連が、五六人打揃ふて西郷邸に押寄せて。

「貴下の御了見を伺ひませう！」

と詰めかけると西郷は頭を掻きながら、

「もつと外の大事なら貴下方に相談をしますが、臺灣征伐位の手事はワハ、ハ、ハ、ハ、何れ歸りには紫檀のお土産でも澤山持つて来ませうワハ、ハ、ハ、」

と顔一杯に大口を開けて笑ふてゐた、其の意氣の爽かさに、流石三浦氏等の豪傑連も喧嘩をしないで引き返して仕舞つた。

■新歸朝者と松方侯爵

今より十數年前、歐米の大學に學びだ一經濟學者が歐米に於る經濟狀態を詳細に調査して歸朝早々侯爵松方正義氏を訪ふて其の最新の研究と觀察とを土臺として、世界の財政に對する所見を陳述して大に氏の參考に供しやうとしたが、氏は之を聞いて、徐ろに口を開いて、

「世界の經濟の大勢に着眼するものは、先づ何故に英國が今日に至るも尙世界の經濟界に重きをなせるかの點に注目しなければ

成らぬ、それは即ち世界物資の集散權を掌握してゐるからで、其の原因は主として港灣の關係である！」

と言ふ冒頭を置いて、滔々と世界經濟の大勢を手に取り取るが如くに説明したので、流石の新歸朝者も非常に驚嘆して歸り去つた。

■原内相の記者時代

現内相たる原敬氏が大阪毎日新聞の社長であつた頃に新たに施設した中に東京大阪間の電話の應用、廣く言文一致體の活用、能ふだけ漢字の減少と云ふ三條件があつた。

例へば「また」の字には又とか、亦、復、還と云ふ様な字があるが、之は煩雜と云ふ處から之等は一切假名の「また」にして仕舞ひ、或は及び、併し乍らの如きも假名にするが如く、文字上の整理を行ふに就て非常に苦心を費したと云ふ事がある、従つて大阪毎日で養成されたものは、皆此の原式の用字法によつて原稿を書くこと云ふ事だ。

■給仕時代の後藤男

今の男爵後藤新平氏は、今の海相齋藤實氏と共に其の少年時代に

は同一の驛馬に給仕をしてゐたものである。

後年二人者が共に立身した後に、齋藤氏が當時の事を客に向つて、

「後藤と云ふ男はあの時から人を人とも思はぬ男であつたが、今も相變らず人を人とも思はず通して居る！」

と語れば、後藤男は亦笑ひながら、客に向つて。

「齋藤は彼の時から可愛い兒だつたよ、我輩が年も一つ上だつたが、我輩が随分ヅルけて、寒い時などは、役人などが給仕々々と言つて呼ぶと、我輩は聞えてゐても火鉢の側にゐて返事をしなかつた、スルト、齋藤が直ぐに往つて呉れたから、齋藤は何

時でも我輩の二倍づゝ働いてゐて呉れたよ！」
と物語つたと云ふ事である。

■堀貞氏の狂歌

嘗て農商務大臣の秘書官をやつた堀貞氏はナカノ、さばけた男で
前農相の桂冠と共に職を辭して、麻布の笄町に家を構えた、其の
移轉の當時に或人が何處に引き越すのかと聞くと、氏は言下に。
我庵は、麻布の奥の、寺の側

■二八女の笄の町

と駄句ツて、當意即妙の風流を表はした。

■寺内總督と故兒玉將軍

今の朝鮮總督たる寺内正毅氏と故陸軍大將たる兒玉源太郎氏との
間に一條の笑ひ話がある。

そは寺内氏は先づ思慮の緻密な方で、日露戦争の時に、或は靴が
足らぬとか、或は鑢詰が足らぬとか、何も足らぬ盡くしであつたが、
陸相たる氏は其衝に當つて如何なる瑣小のものも疎末にしないで、
種々の工夫を凝らして遣りくりして大戦争を遣り通したが、或時氏

は満州軍に令して。

「満州の我が軍隊は日々に幾百頭の牛を殺すが、まさか皮は食ふまい、内地では皮が不足で困つて居るから、肉を取つた残りの皮は送り返へして呉れ」

と云ふ事を命じた、スルト、兒玉氏の言葉が奇抜だ

「我々には戦争をする上に皮扱ひの穢多商賣は出来ない！」
と云ふ返事を送つた、スルト、氏はまた非常に立腹して。

「兒玉のやうな譯の解らぬ男は無い！、此の軍國經營の苦境に當つて、たゞ勝ちさへすれば可いと思つて居る、如何にして安價

を以て勝利を收むるかと云ふ考が無い、殺した牛の皮をまともて送るのに幾ら手間がかゝるか、如何に戦争中とは言へ其位の手廻はしの出来ない筈は無い！ 畢竟戦争の何物たるか、解らぬからだ！」

と語つた、所が其後兒玉將軍が歸つて、此事に就て伊藤公の前で寺内氏を。

「しみつたれ男！」

と嘲つた、スルト、氏は承知しない、二人は公の前で大議論を遣ると、公は之を制して。

「高が牛の事ぢやあ無いか、其様な喧嘩は廢した方が善い！」
と仲裁したので、事が濟むだと云ふ事である、此の一笑話の中にも軍國經營當時の苦心が忍ばれる。

■加藤高明氏と常識學校

前外相の加藤高明氏は頗るタイプの違つた人物で、外交家として一流の人物だ、嘗て人に向つて、日本國民の規則づくめで常識の妙い事を物語つた中に。

「常識の足らない者が處世上どういふ損をするかと云ふと、恰度

暗夜に提灯なしで歩くやうなもので、踏み外し許りする、手探り夜道を歩くもの、姿の滑稽を考がへて見たまへ！、沒常識な男が時勢を解する事が出來ず、社會を解する事が出來ず、人を領解する事が出來ず、時と場合とを領解する事が出來ず、そらういふ沒常識な男は世に處して、何日でも手輕にすむ事を面倒にして仕舞ふ、折角學むた學問を見當ちがひに應用して居る、滑稽と言はうか、寧ろ惘然の至りである、だから、我が輩は友人と日本に常識學校でも拵らへて常識を仕込むで貴ふ必要があるでは無いかと冗談を言つた事がある！」

など、云ふ言葉があつた、實に此の理性的の氏の面影を忍ばせる一場の佳話だ。

■尾崎學堂氏の一言

學堂尾崎行雄氏が先年東京市長を勤めてゐた時代に嘗て東京市が市區改正の爲に一千五百萬圓の外債を募つた、其時氏は市長としてコンミツションを私しては居ないかと云ふ疑を市會議員に抱いて居る奴があつて、其の意味の詰問をした、スルト、氏は慨然として。「自分は政界に在ること二十二年、未だ嘗て不正の名利の爲に一

身を犠牲にした覚えは毫も無い！」

と自己の立場を言明した一句には、其の光明正大なる面影がアリくと浮むで、多數の疑念は釋然として氷解したと云ふ事である、これは其の一例に過ぎないが、氏の徳操の一世に卓越せるは、蓋し欽仰する人の多き所以である。

■後藤教授と熱心な研究

東京高等師範の教授後藤牧太氏が其の青年時代に荐りに植物の研究を遣つてゐた頃に、氏を知れる一處女が立派な花を氏に呉れた、

スルト、修學熱心の氏はすぐ其花をむしつて例の植物解剖を遣つて滅茶々々にして仕舞つた、之を見たる例の處女は氏が立腹して花を滅茶々々にしたのだと思つて尠からず獨り頭を悩ましたと云ふお安くない青春時代の艶物語がある。

■鈴鹿保家氏の商標

深川佐賀町に居を構へて熱心に肥料業を經營し、且つ肥料の科學的研究に従事せる鈴鹿保家氏の肥料の商標に馬印と鹿印といふのがある、其の命名の由來を聞くと、血あり涙あり、勇あり骨ある氏の

前生涯の奮闘史を紀念するもので、氏が其未だ志を得ざるの時に當りて、人々から馬鹿者と擯斥されたるに關らず、奮闘多年、遂に其の目的を達したる今日に至りて、然かも、當時を忘れず、之を追懐して然かも珍妙な商標を附けたものぢやさうなの。

■大隈伯の遭難當時

大隈伯が其昔條約改正の提案をなして天下の怨府となつて來島の爲に爆裂彈を投げ付けられた時、變を聞いて伊藤博文氏は

「暗殺を免れない人！」

と語つたきりであつたが、黒田、西郷、山縣等當時閣臣たりし人物も皆其れづくに噂し合つてゐたが、常に大隈を小人と嘲罵せし氷川の達人、勝海舟は變を聞いて。

「奴、刺られたな、死なない限りは益々減らず口を叩くだらう、窮する時に大廣告をするのが大隈の癖だから、一體あれは自賛を得意として居るからね」

と、遭難と前後して、大隈の外相を辭するを聞くや、海舟は「何故辭職したのぢや、未だ至らぬ！、器が小さい、一層頑執に遣るべきぢやに」

と批評したさうぢや。

■井上代議士の隠し藝

衆議院議員として、且つは、富士紡の商務部長として知られたる井上篤太郎氏は、八面玲瓏、當代稀有の人物だ、三十議會に臺灣に於ける棉業獎勵の建議案を呈出して、精細緻密の辯論を遣るかと思ふと、氏は獨り考思に耽つて發明創案に身を委ぬる事もある、されば、氏が一面に有數な發明家たるの隠し藝を有する事を知るものは比較的に尠い。

氏はまた一面に非常な嚴肅家で、其の愛兒の工藝化學を修めて帝大を卒業して、富士紡に入社した時は、氏は當時同社の工場長として其の敏腕を揮つてゐたが、其の愛兒に對する嚴肅で、下等の職工と同一の扱をして、職工的の執務から鍛へ上げさせたと云ふ事で、學術と實際との調和に就て尠からず其心を傾くる事は此の逸事でも想像する事が出来る、兎に角、現時實業界の一異采である。

逸名
話流

ハツクシヨソ
噫
終

【製複許不】	
大正二年七月九日印刷 大正二年七月十六日發行	定價全十三錢
著者 拳骨坊 發行者 磯部辰次郎 印刷者 菅井十郎	東京市日本橋區竈門二丁目九番地 東京市神田區松住町五番地
發行所 磯部甲陽堂 東京市日本橋區竈門二丁目九番地 振替口座一五〇五六	附奥ミサク
圖刷印舍文碓	

珍袖
落語集

ポケット形優美装幀
四百余頁
定價金參十錢
送料金四錢

傑作落語二十四篇を集めた酒落た本、面白くって可笑くツてたまらない。

どんな苦蟲屋も一讀腹を抱へ再讀頤を外づすと云ふ滑稽ばかりある

274

285

終

甲陽堂發行